

学習の質を高めるための授業の在り方に関する一考察（2）

溜池 善裕・田平 佳祐

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要 第9号 別刷

2022年8月31日

学習の質を高めるための授業の在り方に関する一考察 (2)[†]

溜池 善裕*・田平 佳祐**

宇都宮大学共同教育学部*

富山市立堀川小学校**

学習の質の高まりについて、常に質の高い学習をつくることができ、その高まりは一単位だけではなく、各教科等にも広がっていくことを考えている。その際、子ども理解に基づいて、学習の質を確かに高めていく支援が必要である。子どもが自分の学習を確かにしながら、自分たちの学習をつくり合える授業の在り方について、授業記録や作文を手がかりに考察した。

キーワード：学習の質、各教科等の指導、子ども理解

1 はじめに

学習の質を高める指導を行う中で、中心単位における指導と各教科等を通した見方・考え方を体得する指導とをどのように関連させるか、同時に学びを深め合う仲間の存在意義をどのように明確に意識させるかが指導上の課題として明らかになった (1)。

そこで、今年度は、社会科の学習と関わらせながら中心単位における学習の高まりを捉え、子どもたちが自分たちの学習をつくることができるような単元の構想の在り方について考察し、上記の問題の解決をはかりたい。

2 研究主題および研究方法について

(1) 研究主題解明のための仮説の関連

子どもの学習が高まっていく過程についてはこれまでの実践研究を踏まえると、子どもの学習には次のような3つの節目があるのではないかと考えられる。①社会科を中心としたひとり学習の支援によって、中心単元の学習対象が内包する社会事象を多面的・多角的に自分の着眼点をもって考えることがで

きるようになる (ア)。②ひとり学習の継続により、子どもは自らの価値判断に基づいた自己選択を繰り返しながら考えを深めていくが、その際、仲間の存在が不可欠であり、仲間の学習の存在意義を自覚するだろう (イ)。③さらに、1年間を通して学習の質が高まり最終局面にそれが表れるだろう (ウ)。なおこのような節は、未だ仮説であるので、それぞれを (仮説ア) (仮説イ) (仮説ウ) とする。

(2) 仮説と研究方法

<仮説ア：社会科を中心としたひとり学習の支援>

総合的な学習の時間だけではなく、社会科を中心として社会的事象に多面的・多角的に考えることができるようになるためには、それが出来るような学習の仕方を指導する必要がある。この指導では、子ども達が学習対象に対して自分の感じ方を大切にしながらも、事実に基づく多面的・多角的な学習をつくり続けることができることが目指されるが、そのプロセスを明らかにする。

<仮説イ：助け合って学習を作っていく支援>

子どもは自らの価値判断に基づいた自己選択を繰り返す中で、それぞれの学習を持ち寄り、助け合う学習としての話し合いを進めることができる必要がある。話し合い前には「自分の学習」を連続してつくれるように指導するだけでなく、あらかじめ学習を整理したり、全体で考えたい問いを発見し共有したりする必要があるが、そのための支援の在り方について子どもの事実を手がかりに考察する。

[†] Yoshihiro TAMEIKE*, Keisuke TAHIRA**:
A Study on Teaching Methods for
Improving the Quality of Learning (2)
Keywords: quality of learning, subject
guidance, understanding of children

* Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya
University

** Toyama Municipal Horikawa Elementary
School

＜仮説ウ：資質・能力の連続的發展に考慮した連続単元を2つ設定する＞

単元を二つ設定し、一つの単元で育つ資質・能力が、次の単元につながり、第二単元における個々の学習と、助け合う学習としての話し合いの資質・能力がさらに伸張していくことが目指されるが、そのための指導の妥当性を検討する。

(3) 研究の条件

- ・第5学年の33名。筆者はこの学年を5年間持ち上がっている。ただし、3年、5年で学級編成を行っている。この児童を対象とする。
- ・連続単元については、前期「南富山駅」を2021（令和3）年5月から10月、後期「Society5.0」を同年11月から2022（令和4）年2月に実施した。いずれも堀川小の「社会科・総合的な学習の時間」としての位置付けである。
- ・観察対象児（M児）1名の学習の歩みを中心に分析し、ほかの児童との関わりや比較を通して、上記の仮説を検討する。
- ・M児は、両単元において、学習対象の「駅舎」や「未来社会」がもつ問題や事実に迫るにつれて、自身の視点が、単元の終末には「人」や「自分自身の在り方」へと移っていった。さらに、各教科等の自主学習では、問いをもって継続して取り組む様子が観察された。

3 M児の歩みの概要

(1) 前期単元「南富山駅」

M児は、「南富山駅」の5月10日の提示の時間において、駅舎の写真や時刻表を見ながら「富山駅は新幹線が通っていて、東京や金沢にも行けるから南富山駅よりも便利」と発言するが、南富山駅や駅周辺商店街のフィールドワークで出会った高齢者との出会いから「大切な駅」と振り返りを書いている。M児は、利用者の立場を入り口に南富山駅の学習を開始したのである。しかし、南富山駅の駅舎の古めかしさに触発されると、駅の歴史について調べ、かつては笹津線が、さらには乗り換えが不便になった結果として射水線も廃線になったことなど、富山地方鉄道にかかる廃線の歴史とその原因を調べるようになった。

6月にはまちづくりの会の会長と出会うが、「自動車は家にあるから便利」と、自動車と電車の利便性を比較するに留まるなか、7月には市役所の環境

政策課の方に話をうかがう機会が設けられると、今度は環境面からも考えるようになり、結果的にM児は、aどのように学習を進めていけば良いか分からなくなったようであった。7月21日の授業では「これからも南富山駅が残らないと不便になる人がある」「駅が残るためには」のように、利便性と存続という視点から、南富山駅が在り続けていく意味を考えざるを得なかったようである。夏休みには、駅構内に南富山駅がもっている電車の**b歴史や廃線した笹津線や射水線についてまとめ、電車の利用促進を呼びかけてはいるが、その両者がどのように関連しているかは明確ではない**。

9月には、これまでの学習を振り返り、利便性即ち新しいものに魅力を感じてしまう自分であることに気付きながらも、存続即ち南富山駅や商店街を利用する高齢者等の**c視点が統一されないまま、富山県全体における公共交通の必要性へと学習を移していった**。自薦・他薦の末、子どもたち自身が進めていくパネルディスカッションの司会者を務めたのではあるが、兼ねてより子どもたちが要望していた企画がまちづくりの会の方との協同で「キッチンカーテイクアウトマルシェ富山」が実現すると、「南富山のまちを盛り上げたい」とM児の学習をまとめた自作のチラシを作って配ることに奔走し、「本当の賑わい」とは何かを考えるようになった。ここにおいては、駅の建て替えよりも、一人ひとりの利用者がどのようにすれば乗降客数が増えていくのであろうかと考えつつ、**d南富山駅がこれからも地域に在り続けていく存在であって欲しいと願う姿が顕著であった**。

(2) 後期単元「Society5.0」

本単元提示の時間において、M児は政府広告の動画を視聴すると、Society5.0の社会について様々な想像を巡らせ、「AIは賢いから、毎日献立を作る母親が助かりそう」「家族の会話が減ると言っている人が多いけれど、逆に家族の時間が増えて会話ができてくらしやすくなるのではないかと話した後、閣議決定の内容や社会状況を調べることを通して、一人一人が快適に暮らすことができるようにSociety5.0が目指していることを知るのである。

この過程において、宅配ドローン、自動運転等が既に開発されていることを知ると、これらの技術が「消費者の手には届いていないのではないかと」している。また、既に始まっている人口減少からは、「働

いている人がいる中で今、Society5.0を達成してしまうと、混乱する人も増える」と心配な気持ちも書いている。11月の授業では、「AIが増えていくこと社会が豊かになっていいことだけれど、消費者にとって製品が高くて手が届かないのではないか」と話した。

その後、日本が抱える、貧困・人口減少・食品ロス等の社会問題からSociety5.0について考え進めていったところ、社会問題は解決していくが、引きこもりや自殺等のような人の気持ちに関わる問題はAIには解決できないと考えている。e 人間中心の社会を目指しながら、人間が苦しむ社会になるのではないかという矛盾を発見するのである。この解決のためには、AIに任せきりではなく、人間自身が変わっていくべきなのではないかと考える中、「感情分析をするAIがあるから引きこもりの解決の可能性がある」と、AIの可能性についての話を聞くのである。けれどもM児は、この話によって、社会を構成する一人一人の人が抱えている「心の問題をAIが解決することが難しい」と自分の立場をより鮮明にし、次第にf 人が生きる意味や人が生きる役目について考え始めていく。冬休みになると、QRコード付きのアンケートを校区の施設に掲示して、地域住民から社会的問題について意見を求めたり、家族が「OK google」を一日平均1.4回使っていることや特に父親がそれを最も多く使っていることから、AIの利用については年齢差があることに思い至ったりしている。

このような学習を進めていく中で、g M児はAIの全てを否定するのではなく、社会の変化に伴う中ではAIの必要性を考えたり、AIと共に生きる人間の在り方に思いを寄せたりしているようであった。

4 仮説のごとの検証

<仮説A>に関して

11月13日、14日の二日間にわたって行われたイベント「キッチンカーテイクアウトマルシェ富山」翌朝のくらしの時間、「たくさんの人が来てくれて見たことないくらいいたから、盛り上がった」「チラシを配ったときにありがとうと言われて、そんなことをしている自分たちであることが嬉しかった」など、賑わいや自分たちの取組に対して程度の評価をする仲間が多くいる中、次のようにM児は話した。

令和3年11月15日（月）朝のくらしの時間

みんな話を聞いて、長期的な賑わいって難しいと思う。キッチンカーの目当てでは達成できたのかもしれないけれど、車の利用が目立った。商店街の本当に売り上げが上がったのかも疑問。イベントを開催することや、駅の建て替えには費用がかかる。本当の南富山駅の賑わいってどうしたらいいのかと思った。もう少し考えてみたい。

この2日間までの準備も含め、自分たちの取組に対して批判的に考えるM児は、たくさんの人がイベント会場に来ていたが、そのほとんどが自動車の利用であったことに着目し、南富山駅そのものの賑わいになっていないのではないかと考えたのであった。さらに、周辺商店街にもお客さんが利用したのだろうかと、仲間の話を聞いて更なる疑問をもった。そこで、実際に調べてみるように促したところ、周辺商店街にあるパン屋、餅屋等にインタビューをした。その結果、「2日間は人が来ていてお店も賑わって活気があった」「イベント会場には人がたくさんいて活気があってよかったのではないか」など、自分の予想が的中する一方、イベントに参加したいから南富山駅やその周辺に来たのであり、イベントがないと人が集まることは難しいということも明らかになった。M児は、この日の作文に次ように書いている。

令和3年11月15日（月）作文抜粋

知る→好き→賑わう

受付でチラシを配った。チラシには、字が多くてあまり読んでくれないようにも見えた。今度は、図を入れてより楽しみがあるようなチラシにしたい。古い南富山駅だけれど、いいところを伝えることで、南富山駅の影響が変わってくれたらいいと思う。イベントを2日間やっただけでは、南富山駅や南富山は盛り上がらない。南富山駅や南富山について知ってもらい、好きになってもらえたら賑わうと思う。

M児は単元との出会いにおいて、南富山駅の駅舎の古に触発され、路線や周辺商店街の歴史について調べていた。荒地であった堀川の地域であるが、大正時代に南富山駅ができてから、堀川地域が農村の街として栄え、その必要な物品を揃えるために商

店が賑わった。また、付近には北陸街道もあり、南富山駅は交通の要衝であった。しかし、今日では、モータリゼーションや新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、利用者が減少している事実がある。南富山駅の駅舎の雰囲気から近寄りがたかったり、自動車の方が便利だから電車を利用しなかったりと、南富山駅を利用したいのに、できない利用者・しない利用者を慮っているのである。このようにして、M児は自分自身がもつ問題の所在を、当初の南富山駅という建物の歴史から、現在の南富山駅、富山県や周辺商店街、最後には一人一人の在り方へと移している。それはなぜだろうか。

同時期に実施している、社会科「くらしと自動車産業」の学習を手がかりにしてみよう。まず、この学習でM児は、国産車と外車の世界販売台数のシェア、海外との自動車の輸出入等、海外と日本との関わりから学習を始めている。M児は調べてきたことから、国産車が売れるということは日本の企業は利益が得られて景気が良くなるが、海外の企業はそれに押されて利益が望まれないことを知り、国産車の販売台数はこのままでよいのだろうかと疑問をもった。そこで自動車だけではなく、他品目の貿易についても同じような視点で見てはどうかと促したのである。すると、自動車産業では日本の産業が上位であるが、自動車の部品を作るための原料は輸入が多くを占めていること、これまでの学習と関わらせて食糧自給率が低いために食料品は輸入が多いこと、外国人労働者を日本に受け入れている自治体が増えていること、日本人が外国に出向いて直接技術を指導していることなどを突き止めることとなった。そしてこの学習の最後には、「海外の技術で日本の産業は成り立っている」ことと「日本の輸出の機械製品で日本の技術が伝わる」ことを共にノートに記述している。そして、M児は後期単元「Society5.0」の終末において、次のようにノートにこれまでの学習についてまとめている。

令和4年2月16日（水）作文抜粋
人にしかできないことを

今までの「Society5.0」では、人の仕事をいつか奪っていくので、人は生きる意味があるのだろうかと思っていた。でも、人にしかできないこともあると思う。確かに、AIの方が人より

も賢いのは事実だけれど、人が自らやったことで味わえる気持ちは社会が進むわけではないけれど、自分の進化にはつながる。これからのくらしでは、自分の考えを尊重して、人にしかできないこと、私にしかできないことを見付けていきたい。

人が生きる価値は、人が自らの手で仕事を行うことができることだと考えるM児において、仕事がAIにとって代わることは、人が自ら仕事ができなくなることで、つまり仕事をAIに奪われることである。しかし、AIによる人の暮らしの支援の必要性については否定出来ない。M児はAIによる仕事の結果や効率よりも、一人一人が仕事に取り組む思いや姿勢等といった過程に価値をおいている。仕事によってはAIに頼らざるを得ないことも出てくるであろうが、人が自らすることにこそ意味を見出しているのである。

M児を追ってみると、社会・総合的な学習の時間そして社会科においても、対象への感受性が強く、対象に共感し、また入り込んで、その立場になって考え行動しようとする。それは、対象と自己が同一化し、対象がもつ苦しさを自分のものとして受け止める傾向の強さを示している。この感受性が、対象に翻弄され、下線部aのように、学習の方向性を見失う事態に陥らせていると考えられる。対象との同一化は、対象そのものを分かつようとする、血の通った学習となる第一歩ではあるが、そこから抜け出し、対象を突き放して捉えようとするのが出来なければ学習は次のプロセスに移ることはない。けれども学習は下線bのように学習は羅列的で支離滅裂でM児による体系化がなされないまま背骨が通らず、また下線部cのように担任が学習を急ぐその思いに翻弄され、下線部dのように感情的な思いにすぎるだけの学習となっているのである。学習が作れていないM児が思いにすぎたそこに足場を見出そうとするのは当然であろう。

したがって、五年生であれば「キッチンカーテイクアウトマルシェ富山」は、統一され止揚された視点から客観的に捉えられ、学習する対象の全体の中に位置づけられるはずのところ、そのイベントの主催者の思いに強い影響を受け、自作のチラシを作って配ることに奔走してしまうような活動しか生み出さないのである。まさにM児は這い回っているの

である。対象に影響された強い願いから離れることができないまま、願いに動かされた活動にM児全体の学習がおおわれてしまい、暗闇の中をさまよい出口の見えないM児の学習での苦しみに、担任は気づいていないのである。

複数の学習対象に入り込み、それによっていくつにも引き裂かれた自己を、思いにすがって維持するM児は、そのまま後期の単元に入っていく。しかし、Society5.0は、前期の単元のようにその問題に関わっている人や活動に直接取材するという性質のものではないため、きわめて抽象的な学習を子ども達に強いることになる。したがって、後期単元では、対象と一体化するような学習が行われることはない。すでに前単元において、複数の対象に入り込むことによって引き裂かれる自己というものを経験しているM児は、引き裂かれることを経験していることもあって、下線部eのように矛盾に出会うのは必然であろう。けれども、あくまで抽象度の高い学習では、抽象的思考と具体的思考の往復運動、ここでは矛盾を含む抽象的思考を端緒とし、現実の具体的事実に向かうことで、その矛盾の原因について思考しつつ、学習を深めていくような、連続的な往復運動をすることはできない。

このような単元の性質が、M児に往復運動をさせず、下線部fのようにM児を引き引き寄せていると考えられる。なぜなら、対象に入り込み一体化しやすいM児が、一体化しやすく同情したり共感したりする対象は、第一単元で見たようにまさしく「人」だからである。M児が下線部fのような学習をするのは必然であろう。

<仮説イ>に関して

「南富山」の学習において、M児は、子どもたちが自ら進めていくパネルディスカッションにおいて、司会者に立候補した。ここでは「南富山駅を黒字経営にするための人件費削減に伴う機械化の促進」「南富山駅の駅職員の優しさを広げていくことで地域を活性化させること」「南富山駅を新しく建て替えることで、新しい南富山駅の味（よさ）を人がつくっていくことができる」といった、異なる立場の三人のパネラーがいる中で、それぞれのパネラーの意図が聴衆に伝わるように整理したり、主張点を明らかにしたりすることで、パネラーが引き立つような指導を行った。パネルディスカッションでM児は、パネラーの互いの意見について「機械化すると味が

なくなるのではないか」「優しくない駅員はいないのではないか」など、聴衆の意見を汲みながら質問する姿を見せ、最後には「これからの南富山駅について考えていきたいのですが」と、パネラーの意見を上手に生かして、自分たちで考える方向性を提示する姿も見せている。そして、一通りのディスカッションの後、学習に携わっていただいた、南富山まちづくりの会会長・富山市役所環境政策課の方、そしてこれからLRTが走る宇都宮市民の感想を聞いた上で、最後に次のように発言をした。

令和3年10月15日（金）パネルディスカッション

パネラーの皆さんや参加していただいた皆さんの意見を聞いて、南富山駅を建て替えた方がいいんじゃないかなって思っています。「建て替えて新しいよさをつくる」Aさんのアイデアがすごいいいなと思ったし、Bさんの「南富山駅の駅員さんは優しいから広げたい」という優しい気持ちが伝わる。「建て替えない方がいい」と言っていたCさんはお客さんのことを考えて変わったと思いました。私も南富山も南富山駅も思えるような人になります。

これまでの学習への取り組みや、思いや願いの違うパネラーの主張の違いを明らかにしていくことは、自分の学習と仲間の学習とを重ね合わせることもある。この重ね合わせこそ、M児にこの学習が自分たちの学習であることを明確に自覚させ、互いの考えのよさを認め合うこと即ち仲間の存在意義の明らかな意識化であると考えられる。それを裏付けるのが、パネラーの一人であるA児の「機械化」に関する主張についての、「機械化をするための予算や機能について、具体的に考えていくことが必要」「南富山駅のよさが失われてしまわないような駅の在り方を考えたい」というノートの記述である。周辺商店街や一人一人の人の在り方を考えながら学習に取り組んできたM児にとって、A児の「機械化」の考えは、M児とは反するものである。機械化の促進に伴い、M児の話す「よさ」である駅職員がいなくなるため、その方々の仕事が無くなってしまいかもしれないからである。しかし、南富山駅のことを思うA児を感じたからこそ、今一度、「機械化」の視点を受け止め、「具体的に考えていくことが必要」と冷静に考えることが出来ているのである。

単元の終末でM児が授業で話したのは、次の通

りであった。

令和4年2月2日（水）授業記録抜粋

やっぱり自分の学習と重ねて考えると、私も機械化しなきゃだめだと思う。社会問題についてAIはほとんど全てを解決する。社会問題は人の生活に関わってくることが多い。例えば高齢化だったり、引きこもりだったり。それを解決してくれるなら、AIはあった方がいいと思う。社会問題には人口減少がある。人口減少はくい止める方法がない。だって人口が増えるしか方法がない。今すぐに全部機械化することではない。全部機械化をしたら、Nさんが言ったように「機械化をすると仕事が無くなる」から、人口が減るごとに人の空きをAIで埋める、少しずつAIを進めていく点において、すごく大事だなると思う。Society5.0の達成を少しずつ進めていったら、遅くなるかもしれない。でも、Sさんも言っていたように「人が困らない」ということが、人間中心の社会だと思う。色々AIを使っていくべきだと思う。どう？

（M児の発言後、L児が願う未来社会を話し、仲間から質問が殺到する。）

Lさんの話をどれだけ聞いても、空想だから何も生まれないよ。

<仮説ア>で検討したような学習がM児の中で成り立進んでいるとすると、上記の発言はどのように解釈しまた位置付くのだろうか。

M児は、パネルディスカッションでは、司会者に立候補し、みんなの学習に積極的に貢献しようとしてはいるが、聴衆の意見を汲む行為は、対象に入り込むことが上手なM児の性質がそのまま表れている部分である。対象に入り込めてはいるのであるが、そこから抜け出し、対象と自己との矛盾を統一し、その統一から新たな知見を提出することはできないのである。それを顕著に示すのが、「優しい気持ちで伝わる」「Cさんは（中略）変わったと思いました」「南富山も南富山駅も思える人」になりますという言葉である。

一方L児のような抽象的な思考、まったく具体的に降りることのない思考に、M児は違和感を感じるものの、その違和感をつぶやきとして表出することは出来ても、違和感を頼りに一步踏み出すこと即ち実践に自分の身を移すことはできないのである。担

任は、批判的なつぶやきをするM児を見たのは初めてであるとしているが、それはあまりに遅きに失していると同時に、そのようなつぶやきをしたのであればそれを捉えて、そのつぶやきの所以をM児に考えさせ、またクラス全体に投げかけることで、学習として不完全な部分を子ども達によって明らかにし、そのことを通して実践への糸口をつかませる必要がある。しかし、担任はそのどちらのタイミングも失っているのである。

<仮説ウ>に関して

前期単元では南富山駅を学習対象とした。現在の南富山駅から、南富山駅の古い駅舎に着目し、公共交通や人々のくらしの変遷といった歴史に目を向けることで、これからの公共交通の在り方や、持続可能なくらしについて考えていくように単元は進んだ。そして「南富山駅」の単元の終末授業でM児は、南富山駅の建て替えについて次のように話した。

令和3年10月2日（金）授業記録抜粋

南富山駅を建て替えるっていうのは、タイミングが大事だと思う。私は建て替えた方がいいと思っている。だって「外見とか全てではない」ってDさんが言っていたけれど、南富山駅が新しくなったとしたら、私は新しい方に引き寄せられるタイプ。新しい物がとても好き。駅がもつよさとかちょっと分からなくて、古い物の何がいいのかな。古くても、何もいいことはないかなって思う。でも、インタビューをしていると「駅が建て替えられている間に工事中にやっぱり使えなくて不便になる」と言う人もいた。その人のことを考えないといけなくないけれど、やっぱり建て替えた方が、お客さんがたくさん来ると思うし、話題がいずれは少なくなるってこともあるかもしれないけれど、古いのを使うよりも、新しい南富山駅を使ったら、お客さんが使いやすくなる。

しかし、このようなM児の動きは、第一単元の学習を通して習得した資質・能力から来ているものではない。なぜなら、第一単元では、まさに対象に翻弄され、南富山駅に関わる異なる立場の対象の複数の見方を止揚し統一する視点を作ることさえできず、学習の方向性を見失ったり、対象への思いだけで奔走したりしているから、そこで何らかの新しい学習の仕方や、複数の見方を止揚し統一する創造的

学習をしていないからである。したがって、このような司会者としての動きは、担任による強い働きかけと示唆の通りに動いただけ、即ち担任がどのように進めたいかというその思いを受け、担任という対象に入り込んで、その気持ちを汲み、動いただけにすぎない。

富山地方鉄道の歴史について学習していたことが、この発言の背景にないことは作文を読めば分かることである。なぜなら、地鉄の歴史にどのような歩みがあったかを知っていれば、南富山駅の建て替えについて、歴史的視点から発言がなされるはずだからである。M児の発言は、「外見」「新しいように引き寄せられる」「古くても、何もいいことはない」という言葉に示されるように、認識の根が極めて浅く、目の前の利便性である「工事中にやっぱり使えなくなる」に強い影響を受けていることも見逃せない。

このような中、11月からの後期単元では、Society5.0を学習対象とした。時代が劇的に変化する今、誰もまだ知らない少し先の未来を考えることを通して、自分の描く理想の未来とくらしている現実との差異や異なる価値観をもっている仲間との話し合いから、自分がどのようにして生きていくのかを考えることをねらいとしたのである。そこにおいてM児は単元終末のまとめに次のような作文を書いた。

令和4年1月18日（火）作文抜粋

人とAIの両方を使う

社会科の自動車工業の学習では、組み立てる際に、人を使ってやらないといけない工程がある。人でないといけないことがある。初めは機械を普及していったら働く人が少なくなっていくのではないかと考えていた。人口が減る＝働く人が減る。人の最大の役目は人の気持ちを考えることだと思っていた。でも、Oさんの「AIは感情分析ができる」という話から人の生きる意味が無くなり「機械中心の社会」になってしまうのではないかと考えてきました。その次の授業では、Iさんが「AIと一緒に働けばいいのではないかと」言っていた。社会問題から考えてみると、人が働けるのであれば、AIと一緒に働くのがベストだと思います。

人口減少は懸念されている社会問題の一つである

として、働き手も減少することは現在のようなくらしを送ることができないと心配しているM児なのであろう。一方で、同様に技術によって労働の質の変革が迫られることになった産業革命や、コンピュータのシステムによる生産管理や、通信技術の発達による新しい産業の起こりというような、世界および日本の産業の歴史については、全く目が向いていない。このような視点によって働くとはどういうことであるかについて考えることなく、M児は人について、浅いところで考えているに過ぎないのである。

この作文からは、対象によって翻弄された第一単元の印象が強く残り、抽象的で生活との具体的な関係や接点が見出せない後期第二単元についての言及は、全くない。このことが意味するのは、第二単元の設定の失敗は勿論であるが、子どもの社会認識の質を見究めつつ学習の質がどのレベルにあるかを、担任が捉えていない所に、失敗の大きな原因があるという点である。既に述べたように、第一単元では、M児自身、学習の方向性が定まらず、対象に翻弄される中、複数の対象とその学習活動が並列に併存している状態であった。シンポジウムでのM児の出のうまさは、対象としての見方の異なる仲間や、教師の意向に深く入り込み、まさに複数の対象ごとの視点に寄り添い、それぞれの思いを大切にしたいだけのことであって、それ以上でもそれ以下でもないのである。即ち、対象に情緒的に同情し共感すること、それによって対象に翻弄されることを、今まで通り同じように行っているだけなのである。

2月15日 作文抜粋

南富山駅まとめ「富山県は電車の街」

私は「南富山駅」の学習で、南富山駅の建て替えと南富山駅がもつよさについて考えてきました。きっかけは、話し合いで「建て替えたらいいのかなのか」という話があったから。話し合いでは、建て替えに反対する仲間がいて、その理由が「南富山駅がもっているよさがある」でした。建て替えに賛成で、きれいな南富山駅の方がたくさんの人が来て、賑わうからよいと思っていたので、古い南富山駅では何がいいのか、そもそも南富山駅がもつよさは何なのか疑問にもちました。そこで、仲間にアンケートをとってみると、「古さ」であることが分かりまし

た。だから、建て替えに反対する人の意見をもっと考えていかなければいけないと思いました。なぜなら、もしも建て替えをするとすれば、反対の方も納得してもらう必要があるからです。反対の考えを全く分かっていなかったら、南富山駅は何の進化もありません。

そこで、もしも南富山駅を建て替えずに南富山に人を賑わうようにするにはどうしたらいいか考えました。自分の案として南富山商店街を盛り上げることが大切だと思いました。以前、インタビューをした際、電車から降りたついでに商店街に寄ってくれると話しておられたので、南富山の周りが賑わえば南富山駅も自然と賑わっていくのかなと思いました。でも、商店街を賑わせたところで、南富山駅が賑わうという保証はありません。最終的には、やはり南富山駅の建て替えというのは必要になってくるでしょう。新しい製品が数多く開発される現代のことを考えると、古いものはやっぱり好まれな人が多いし、もっと市電に乗りやすいように便利にしないといけないと思います。

私がなぜこんなに南富山駅のことを考えるのかというと、富山県は「電車の街」なので、南富山駅だけ賑わってなかったり人が少なかったりすると「電車の街」らしくないし、私自身も将来利用するかもしれないからです。南富山駅は古いかもしれませんが、でも、便利です。これからずっと南富山駅は在り続けてほしいし、南富山駅を考えられる人になりたいです。

このような状態を担任は捉えることが出来ず、子どもの実態とかけはなれた第二単元を設定し実施したのである。第二単元では提示された問題が、具体的な事実とどのように関連するかについて子ども達は誰も考えられない中、現実の生活とのつながりでその問題を考えることが出来ず、例えばL児のような学習を生じさせている。したがって、子どもの学習を深化させることが出来なかった第一単元、子どもの具体的思考を要求しない第二単元は、子どもの資質・能力を引き出せないまま、活動を放置する状態を作り出している。したがって、資質・能力は伸張しないばかりか、M児においては対象に翻弄され右往左往して這い回ることで苦勞した第一単元ばかりが強く印象に残っているのである。

5 考察

<仮説ア>について

複数教科でうまく位置付けることで、子どもの資質・能力を伸張させるには、子どもにおける対象への迫り方を捉える必要がある。その学習にのめり込み対象に入り込んでそれと一体化すること、堀川小がこれまでもしてきたようなそのような指導法は重要である。しかし、学習において様々な複数の対象が存在するのであれば、そのような情緒にとどまっている以上、対象によってその自己は引き裂かれてしまう。そうならない為には、第一対象と自己との矛盾に気づきはっとさせられて、その対象に尊厳と崇高さを感じて、一層客観的に迫る方法論としての学習方法を子供達一人ひとりが見出し、その矛盾を止揚し統一する創造的学習を、またそれによってもたらされる視点を獲得しなければならない。

それを多くの子ども達が成し遂げることを担任が待たなければならないのである。そして、それを成し遂げつつ教科とつなげて、その視点を生かした学習を子ども達自ら作らせ、そこで足りない資質・能力に気づかせてそれを練習させ、資質・能力を自分のものとさせなければならないのである。

<仮説イ>について

上記アのプロセスと同時に、共に学ぶことの意味を知るための場の設定をし、その為の具体的な方法を子ども達に考えさせる必要がある。その際は、本実践において、上記アのプロセスを踏めていない子については、行わせたような話し合い前の考えの整理は、ほとんど意味をなさない。なぜなら、自分が一体化させた対象から抜け出すことで見えた地平を知らない子どもは、自己を手放すことが出来ないからである。自己を手放すことが出来なければ、他人の良さやその存在の意義に気づきようがないからである。

<仮説ウ>に関して

第一単元および第二単元ともに、子どもの生活現実に見出される事実に関する具体的思考と、それに支えられた抽象的思考を往復出来るものでなければならないことは明らかである。なぜなら、具体的思考は抽象的思考の陥る完全さという観念の世界を繰り返し壊し、それによって学習におけるものの見方・考え方を更新し、そのような生き生きとした見方・考え方に支えられた子どもの学習の方法の必要性を、子ども達に絶え間なく迫るからである。

個々の学習と、助け合う学習をつなぐものは、個々の学習における苦勞を乗り越えて、みんなの役に立つ学習をみんなとの関係において見出すことの出来る子どもである。そして、そのような子どもは、対象を自己から突き放してそれを捉えようとすることによって、新たな資質・能力を身につけ続ける子どもなのである。したがって、第一單元における歩留まり、継続的に学習を作り続ける子どもの割合を捉えつつ、指導方法を変更し、第二單元を選びながらそこに入っていくという指導の構えが必要である。

6 おわりに

対象と一体化したのち対象と自己との矛盾を手がかりに、その対象をむしろ尊厳をもって客観的に捉えようとする中で育つ資質・能力は、対象への情緒からくる思いに留まる子どもをその先に進め、矛盾を止揚し統一する見方・考え方を育てる。そのために教科相互の位置付けや、個々の学習と仲間との学習との関連性が問われてくる。

(注)

- (1) 田平佳祐・溜池善裕「学習の質を高めるための授業の在り方に関する一考察」(『宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要』no.8, pp.117-128, 2021-08)。※本研究は「基盤研究C：資質・能力を連続的發展と道徳的実践生を担保する生活科・社会科の学習指導モデル開発」(20K02727)の助成を受けた。

令和4年4月1日 受理

A Study on Teaching Methods for Improving the Quality of Learning (2)

Yoshihiro TAMEIKE and Keisuke TAHIRA